

# 歴史アルバム 都島

「 なの花や  
月は東に  
日は西に」



▲昭和35年前後の天神祭の様子



▲空襲を受けた当時の京橋駅付近



▲造幣局の桜の通り抜け



▲鶴塚(ぬえづか)



▲与謝野蕪村



▲蕪村の句碑



今より約千三百年以前の都島  
(孝徳天皇時代)地図

▼毛馬閘門



# 都島の歴史

元禄  
明治  
大正  
昭和  
平成

## 〈地名の由来〉

都島区一帯の地は古墳時代中期以降、主に淀川の三角州の発達によって形成されました。当地に人が住み始めたのは平安時代頃からで、当時は法隆寺などの所領が入り交じる榎並荘(えなみのしょう)に属していたと推定されます。

区名は昭和18年4月1日に区が誕生したとき、明治22年(1889)の市町村制施行時に新村名として採用された名称を継承したものです。「都島」の地名は、応神天皇の大隅宮(おおすみのみや)や孝徳天皇の長柄豊碓宮(ながらとよさきのみや)が淀川を隔てた対岸辺りにあったと想定し、これらの宮の近くであるところから生まれた、あるいはこれらの都に向き合う島という意味の「都向島(みやこじま)」が転化したものと考えられています。

## 〈京街道〉

京街道は、大阪の京橋と京都の伏見を結ぶ歴史ある街道で、その全長は38.5kmに及びます。豊臣秀吉による淀川左岸の文祿堤の構築によって成立しました。文祿堤は1594(文祿3)年に工事が開始された治水工事と軍用道路を兼ねた土木事業でした。その後大坂城、淀城、伏見城が築かれると、この大坂と伏見とを結ぶ最短ルートとして、諸大名を動員した淀川左岸の築堤工事に伴う堤防道として誕生したのです。

## 〈毛馬の水門・閘門について〉

明治18年(1885)の大水害を機に淀川の大改修が行われ、同43年に新淀川が開削されました。このとき毛馬で新淀川と分岐する旧淀川の水量調節と舟運の便のために建設されたのが毛馬洗堰と閘門です。洗堰は川の水が常にその上を流れ越す程度の高さに作った堰、閘門は水位の高低差の大きい河川で水を堰き止めて船舶を通過させる装置です。

設計者はオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケで、閘門は明治40年、洗堰は同43年に竣工しました。大正7年(1918)に第2閘門が竣工すると元の閘門は平時は開放、高水時は閉鎖して洪水を防ぐ役割を果たしました。

その後、昭和49年(1974)上流に新毛馬水門・閘門が築造され、同57年に新しく淀川大堰が完成したことにより、旧洗堰と閘門は役目を終えて閉鎖されましたが、一部はわが国の近代治水工事の貴重な遺産として河川公園内に保存されています。

## 〈与謝野蕪村〉

江戸中期の俳壇を革新し南宗画を開拓した与謝蕪村は、享保元年(1716)、摂津国東成郡毛馬村(現都島区毛馬町)に生まれました。本姓谷口、のちに与謝。20歳のころ江戸に出て早野巴人に俳諧を学び、東国から丹後国与謝地方を遊歴後、43歳で画家として京都に定住し、詩情あふれる独特の画境を開きました。俳諧では早野巴人の夜半亭を継ぎ、感性的・浪漫的な俳風を生み出し、芭蕉と並び称されています。

安永6年(1777)作の長詩「春風馬堤曲」は、藪入りで毛馬堤を故郷へ急ぐ女性の情趣を蕪村自身の郷愁の念を籠めて描いたもので、蕪村はこの地を離れた後も幼時を想い毛馬村へ望郷の念を抱き続けていたことがわかります。

淀川左岸堤防上に建つ蕪村の句碑は、「春風馬堤曲」の「春風や堤長うして家遠し」の句を蕪村の筆跡で刻んだもので、淀川改修百年記念として昭和55年(1980)に建てられたものです。

## 〈鶴塚(ぬえづか)〉

旧沢上江村(澤上江村とも書く)母恩寺東北の野中に、『平家物語』に見える鶴(ぬえ)を埋めたと伝える塚です。同書によれば、平安末期、近衛天皇を夜ごと悩ませていた怪鳥を源頼政が射落としたところ、頭は猿、胴体は狸、尾は蛇、手足は虎の姿で鳴く声は鶴(トラツグミ)に似ていたといま。源頼政は摂津源氏源仲政の長男で、保元・平治の乱に功をたて、後に以仁王を奉じて平氏追討を図り、破れて宇治で自殺した人物です。

鶴塚はすでに江戸初期の地誌『芦分船』に紹介され、くり船に入れて淀川に流した鶴の死骸が、下流の浮洲に止まって朽ちた場所だと記しています。